

研究の現場から

堤防、河川敷の役者

散歩コースにしている河川敷で春には菜の花、秋にはコスモスが栽培されて摘み取りまでできる一帯がある。やや殺風景な堤防の景色がほんの少しの期間ではあるが華やいだ雰囲気になり、散策にはもってこいの場所であり、管理している団体の粋な計らいに感謝している。

ところが、スーパー堤防とまではいかないが、堤防強化工事がはじまり、その一角は無愛想なフェンスに囲まれて立ち入り禁止になってしまった。工事現場の柵の中は、今までの管理体制化とは異なり、タデ、チガヤあるいはメヒシバなどが勝手に生える荒地となったが、雑草発生の自然状態での経過を観察できる格好の場所になった。

河川敷は川の流れに身を任せた植物がたどりとくすみかであること、堤防の法面の土は各地から調達されるであろうことから、在来、帰化植物を問わず、いろいろな雑草が発生してくる。ノビル、ワルナスビ、ミヤコグサ、オオバコなど取り上げるときりがないが、いつのまにか優占雑草が決まってくるものだ。雑草だけではなく上流から持ち込まれたであろう桑、サワグルミや柳が定住の地としている一帯もある。

さらには自然発生の雑草に加えて新たに土壤侵食防止のために植え付けられるアカツメクサ、シロツメクサ、ギョウギシバなども加わってくる。

一時的ではあるが放置されてしまう工事現場では、まず種子発芽が容易なイネ科雑草が優占していたかに見えたがタデ科などが目立つようになり、さらには前のすみかで勢力を張っていたかと思われるセイタカアワダチソウなどに遷移していくようである。管理されなければ畑や空地は浮気っぽいもので、居住者の植物を取っ替え、引っ替えるなんて人間味があるものだ。

堤防工事をきっかけに昔習った雑草の遷移の状況を復習し、観察するチャンス到来と思

きや、工事の日程はこちらの都合にはあわせてはくれない。この場所はそのままにして、隣接の、すでに完成された張芝堤防の中からどんな雑草が発生してくるかも追跡することにした。管理のために植え付けられた芝生だけではなく、自ら役割分担を申し出たかのような深根性のいろいろな雑草が発生してくれることで土壤侵食防止になっていて嫌われ者の草も汚名返上の舞台になっているようだ。



カヤツリグサ



ハルタデ



タイヌビエとケイヌビエ

(文とカット 井上信彦)